

国際リハビリテーション研究会

第3回学術大会抄録集

～世界の多様性に貢献するリハビリテーション～

国際リハビリテーション研究会

**国際リハビリテーション研究会 第3回学術大会 第3回学術大会～世界の多様性に貢献するリハビリテーション～**

| 時間    |              | 第1会場 (4-2教室)                                                                                                                                                                                                                                                                                      | 第2会場 (アクティビティスペース)                                                                                                                                                                                                                                              |
|-------|--------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 9:30  | 10:00<br>30分 | 受付                                                                                                                                                                                                                                                                                                |                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 10:00 | 10:15<br>15分 | 開会式                                                                                                                                                                                                                                                                                               | —                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 10:15 | 11:45<br>90分 | 【オープニングシンポジウム】<br>「セラピスト養成課程での国際リハビリテーション教育のあり方：現状と国際看護からの学び」<br>・演者<br>：河野 真 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)<br>：根地嶋 誠 (聖隷クリスティア大学リハビリテーション学部)<br>：宮本 圭 (順天堂大学医療看護学部)<br>・座長<br>：広田美江 (独立行政法人国立病院機構 別府医療センター)                                                                                                 | —                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 11:45 | 12:00<br>15分 | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 12:00 | 12:40<br>40分 | 【ランチャイムセッション】<br>海外研修報告「国際医療保健学実習ミヤンマー研修」<br>・話題提供者<br>：越川七海<br>：田中南帆<br>・演者<br>：鈴木 仁<br>：南沢希和 (国際医療福祉大学成田保健医療学部3年)                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                 |
| 12:40 | 13:00<br>20分 | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 13:00 | 14:00<br>60分 | 【一般演題セッション1】「調査報告」<br>・座長<br>：知脇 希 (帝京平成大学健康メディカル学部)<br>・演題・演者<br>①留学生における学生生活での不安要素とその対策<br>：町田 和 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)<br>②タイの高齢者福祉：ASEAN Learning and Training Centerの視察報告<br>：山口佳小里 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)<br>③ミヤンマー連邦共和国の精神科医療とリハビリテーション：精神科領域における作業療法<br>の可能性<br>：大塚 進 (Rehab-Care for Asia)       | 【一般演題セッション2】「活動報告」<br>・座長<br>：中村賢二 (生活リハビリサポートいな)<br>・演題・演者<br>①リハビリテーション分野におけるグローバルな国際協力：愛知からアジアへ、<br>そしてまた愛知へ？<br>：石本 馨 (Bridges in Public Health)<br>②南米パラグアイ共和国におけるJICA青年海外協力隊としての活動報告<br>：長田真弥 (姉ヶ崎ケアセンター)<br>③ベトナム社会主義国での活動報告と今後の期待<br>：館塚和太 (元JICA海外協力隊) |
| 14:00 | 14:10<br>10分 | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 14:10 | 15:10<br>60分 | 【一般演題セッション3】「症例報告・文献調査」<br>・座長<br>：大塚 進 (Rehab-care for Asia)<br>・演題・演者<br>①文化的背景を考慮したリハビリテーションの提供：ドイツ平和村の事例から<br>：勝田 茜 (姫路獨協大学医療保健学部)<br>②日本におけるタイ研究の動向：2000～2019年度科研費採択課題の分析より<br>：山口佳小里 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)<br>③国際的なリハビリテーション支援に関する研究動向：2009～2018年度日本理学療法学会<br>大会の演題分析より<br>：高橋真里 (東北福祉大学健康科学部) | 【EPA/特定技能関連特別セッション】<br>「外国人介護士の受入れと拡大を考える」<br>・演者<br>：野村 愛 (首都大学東京)<br>：奥村匡子 (首都大学東京)<br>：石井清志 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)<br>・座長<br>：河野 真 (国際医療福祉大学成田保健医療学部)                                                                                                            |
| 15:10 | 15:20<br>10分 | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                                                                | 休憩                                                                                                                                                                                                                                                              |
| 15:20 | 16:50<br>90分 | 【クロージングシンポジウム】<br>「国際リハビリテーションにおける障害当事者とリハ専門職の協働の可能性」<br>・演者<br>：石本 馨 (Bridges in Public Health)<br>：林 早苗 (笹川平和財団 アジア事業グループ)<br>：石田由香里 (JICA北海道)<br>・座長<br>：笹田三郎 (アブカス)<br>：大室和也 (難民を助ける会 [AAR Japan])                                                                                            | —                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 16:50 | 17:00<br>10分 | 閉会式                                                                                                                                                                                                                                                                                               | —                                                                                                                                                                                                                                                               |
| 17:15 | 19:15<br>2時間 | 懇親会                                                                                                                                                                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                                                 |

セラピスト養成課程での国際リハビリテーション教育のあり方：現状と国際看護からの学び

---

・ 演者

- ： 河野 眞 （国際医療福祉大学成田保健医療学部）
- ： 根地嶋 誠 （聖隷クリストファー大学リハビリテーション学部）
- ： 宮本 圭 （順天堂大学医療看護学部）

・ 座長

- ： 広田美江 （独立行政法人国立病院機構 別府医療センター）
- 

当研究会はその設立当初から、国際リハビリテーション分野の「技術の標準化」を活動の大きな柱の一つとしている。そこには、標準化された技術がリハ専門職養成課程の教育内容として組み込まれることや、ひいては、リハ専門職の国家試験において出題されることが含まれる。

しかし、従来のリハ専門職養成校のカリキュラムを見ると、国際リハビリテーション関連科目が設置されているケースは稀であり、あっても地域リハビリテーション関連科目の一部とされているか、あるいはそもそも教育内容として提供されていないケースが多い。リハ専門職の国家試験の問題として国際リハビリテーション関連の出題がなされることは夢のまた夢という状況である。

一方、同じ保健医療専門職の 1 つである看護師養成教育に目を転じると、厚生労働省検討会が作成した「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」には以下の項目が搭載されている。

国際社会・多様な文化における看護職の役割

- ・ ねらい：国際社会・多様な文化における看護職の役割について学ぶ。
- ・ 学修目標：
  - ① 国際社会における保健・医療・福祉の現状と課題について理解できる。
  - ② 多様な文化背景をもつ人々の生活の支援に必要な能力を理解できる。
  - ③ 国際社会における健康課題と戦略を理解し、今後の看護職に求められる役割や責任について考察できる。

また、看護師国家試験出題基準では「看護の統合と実践」という領域に、  
目標Ⅲ. 国際社会における看護について基本的な理解を問う。

・ 大項目 3. 国際化と看護

・ 中項目 A. 看護のグローバル化      B. 多様な文化と看護      C. 看護の国際協力活動  
と規定されている。

このような看護学分野における国際看護の位置は歴史的にどのような変遷を経て確立されたものなのだろうか。そして、養成教育における位置づけの確立という点で、国際リハビリテーションは国際看護から何を学べるだろうか。

本シンポジウムでは国際リハビリテーション教育に先駆的に取り組む 2 大学関係者及び日本国際看護学会関係者から話題提供を得ながら、養成課程における国際リハビリテーション教育について検討する。

海外研修報告「国際医療保健学実習ミャンマー研修」

- ・ 話題提供者（国際医療福祉大学成田保健医療学部 3 年）  
： 越川 七海, 鈴木 仁, 須藤 由佳里, 田中 南帆, 平井 翔一朗, 南沢 希和
- ・ 座長：石井 清志（国際医療福祉大学成田保健医療学部）

私たちは、昨年の授業（国際医療保健学演習）の中で CBR（地域に根ざしたリハビリテーション）について学び、問題分析からプロジェクト立案までを事例を通して模擬的に経験しました。今回の研修はその次の段階に位置する「国際医療保健学実習」の一環として実際にミャンマーで行われました。研修の主な目的は現地で実際に見聞きしたことを基に PCM 手法を用いて、問題分析からプロジェクト立案まで行うことでした。

現地では大学で講義を受けたり、医療従事者に話を聞いたりすることでミャンマーの医療福祉制度を学ぶことができ、日本との違いを感じました。また、病院や施設の見学や障がい児のいる家庭に訪問し、ごく一部ではあるが、ミャンマーの医療の現状や障がい児・者の生活実態に実際に触れることができました。



研修期間：2019 年 8 月 25 日（日）～8 月 31 日（土）

視察・活動：ヤンゴン医療技術大学, JICA ミャンマー事務所, 国立リハビリテーション病院,  
職業訓練校, 児訪問リハビリ, デイサービスセンター, 障がい当事者へのインタビュー

今回、全員が初のミャンマー渡航であっただけではなく、途上国と呼ばれる国に行くのもほぼ全員が初めてでした。そのため、研修中に現地で見えるもの、触れるもの、食べるもの、感じるもの全てが刺激的で学ぶことばかりでした。日本で当たり前のことがミャンマーでは当たり前ではなく、ミャンマーで当たり前のことは日本では考えられない事ばかりで、その一つ一つが貴重な経験となりました。今回の研修を通じ



て、途上国での障害者支援プロジェクトについて、より明確にイメージすることができるようになりました。帰国後のプロジェクトに関する議論においても、それぞれの視点から多様な意見について考える事が出来たと考えています。本セッションでは研修での学びと私たちの考えたプロジェクトについて報告させていただきます。

## 留学生における学生生活での不安要素とその対策

◎町田 和<sup>1)</sup>，森井 和枝<sup>1)</sup>，井上 由里<sup>1)</sup>，志村 圭太<sup>1)</sup>，後藤 和也<sup>1)</sup>

1) 国際医療福祉大学成田保健医療学部理学療法学科

### 【目的】

成田保健医療学部理学療法学科は開学して4年目となった。毎年留学生が入学し、現在総計9名が勉学に励んでいる。1名の学生に対し、各学年の担任3名、アドバイザー教員1名のサポートは手厚く、同級生の協力も得られている。しかし、その中で留学生の多数の無断欠席や課題の未提出、孤立など問題は後を絶たない。そこで、今回、留学生にインタビュー調査を行い、学生自身が抱える問題を明らかにし、その対策を考察したのでここに報告する。

### 【方法】

対象者は2年生5名(22.5±1.5歳)、1年生3名(19±1歳)の合計8名。各個人へインタビュー調査で大学生活での現状とストレステストを実施した。ストレステストは留学に特化したストレスを評価する the Index of Life Stress の日本語版とした。ストレスの種類を言語困難感、文化不適合、人種差別、学業不安、金銭的不安、将来の不安の6つに区分することができ、点数が高いほどストレスが強いことを示す指標である。

### 【結果】

1年生全員と2年生2名のストレステストの数値は他の留学生と比較して高値を示した。1年生は言語困難感と学業成績への不安が最も強く、次いで文化不適合がみられた。高値を示した2年生は文化不適合の値が将来の不安とともに高く、加えて人種差別が高値であった1名は無断欠席が多く、学科内でも孤立しがちな学生であった。その他の2年生は学業不安が若干みられたが、言語や文化、人種差別に関しては非常に低値を示した。低値の学生は部活動やサークルに入っており、普段から日本人学生とコミュニケーションを取っていた。全留学生が留年することに対して心配しており、自国にいる家族の期待を裏切ることとはできないと考えていた。

### 【考察】

2年生の日本人の同級生や教員に分からないことを普段から聞いている留学生は、日本語の理解も高くなり、日本文化に適合していることから全体的にストレスが低い状態であると考えられた。留学したばかりなど、日本人とのコミュニケーションが少ない留学生はストレスが多い状態であり、スムーズな学生生活が困難になっていると考えられた。よって、入学初期から自国の紹介など日本人学生とコミュニケーションをとる機会を設定し、日本語や文化への理解を促していくことが、留学生の不安要素を解消し、スムーズな学生生活を送る一助となることが考えられた。

タイの高齢者福祉  
～ASEAN Learning and Training Center の視察報告～

◎山口 佳小里<sup>1)</sup>, Choomplang Nattadech<sup>2)</sup>

1) 国際医療福祉大学成田保健医療学部作業療法学科 2) 国際医療福祉大学医学部

【はじめに】

タイの高齢化は急速に進んでおり、60 歳以上の人口は現在の 17%から、2027 年には 25%を超えると推定されている。このような高齢化に対し、WHO の active aging（活動的な高齢化）を基盤として、高齢者の社会保障、公的扶助、社会福祉、社会参加等の領域における様々な施策が展開されている。

【視察内容】

ASEAN Learning and Training Center on older persons は、2014 年に Chon Buri 県に設立された、社会開発・人間安全保障省高齢者事業局管轄の、高齢者ケア従事者育成のためのトレーニングセンターである。施設内には、寮、食堂、会議室、講義室、実技室等が備えられている。センターの使命は、高齢者福祉モデルの開発と運営、高齢者のためのカリキュラム・訓練プログラムの開発、高齢者の学びを推進するメディア開発と高齢者にとって有益な情報の公開などである。対象者は高齢者ケアに従事する人々（専門職ならびにボランティア）である。専門職としては、高齢者施設や地域の行政職員、社会福祉士、心理士、介護士である。ボランティアも対象であるが、これはケアボランティアを指す。ケアボランティアとは、タイにおける地域で高齢者ケアを担う人材のことである。1 回の研修に 50 名程度が参加する。地域行政を介して広報され、申込がなされる。プログラム終了時に、氏名・性別・年齢・写真入りのリストが作成される。これまでの修了生をみると、40 歳代～80 歳代、60 歳代が最も多い。研修プログラムは合計 74 時間で、社会福祉専門で介護の実務経験のない施設長 1 名で担われている。高齢者介護と介護予防に関する内容を含み、脳機能を賦活するための指の体操など、心身機能面に着目した活動が組み込まれている一方、参加を促すような活動はそれほど取り入れられていない。修了生はそれぞれの地域に戻り、受講して習得した知識や技術を地域に還元することが期待されている。2019 年 8 月時点で修了生は 30 名である。

【考察】

タイの介護従事者育成に関して、国が研修制度を策定しているが、十分に普及しておらず、民間の施設、病院、学校等が独自に研修等を実施し、介護を担う人材を育成しているという現状がある。今後の高齢化に向けた体制整備が重要である。

ミャンマー連邦共和国の精神科医療とリハビリテーション  
～精神科領域における作業療法の可能性～

◎大塚 進<sup>1)</sup>, 秋山 佳世子<sup>2)</sup>, 鈴木 一登<sup>1)</sup>

1)NPO 法人 Rehab-Care for ASIA 2)指定訪問看護アットリハ新城

【はじめに】ミャンマー連邦共和国（以下、ミャンマー）では作業療法士の養成が視野に入ってきた。日本からの支援も見込まれるが作業療法の対象として重要な精神科領域についてまだ十分な情報が得られていない。今回、ヤンゴンの精神科総合病院を見学する機会を得たのでその現状を報告する。

【目的】ミャンマーの作業療法士養成を視野に入れ、精神科医療分野でのリハビリテーション・作業療法の現状を探る。

【方法】勝田（1）の報告等を参考に見学時に得られた情報を整理・検討する

【結果】勝田（1）によればミャンマー全土で単科精神科病院が2、薬物依存治療病院2、薬物依存クリニック73、メタドンクリニック46、精神科専門医師200、精神科看護師166、臨床心理士2、ソーシャルワーカー10、（作業療法士）2といった基盤がある。

今回、上記2か所の単科精神科病院の一つであるヤンゴンメンタルヘルスホスピタルを訪問した。入院病床がおよそ1500の大規模病院である。ヤンゴンの東ダゴン地区にあり中心部からは車で1時間ほどの郊外に位置する。約10年前に中心部から移転したので広大な敷地に病棟等が点在しているが建物は比較的新しい。特徴的なのは治療・入院の患者類型である。アルコール関連の入院患者がおよそ4割、次いで気分障害と薬物依存であり、日本で多い統合失調症の患者数は少ない。ベッド回転率が11（ベッド/年）だが入院患者の約半数は退院見込みのない長期（社会的）入院患者と聞いている。外来患者は1日あたり平均90人。治療活動の詳細は把握困難であるが、入院・外来部門とも比較的明るく閉鎖的な印象は少ない。心理社会的リハビリテーションとリカバリーのユニットがあり、作業療法も行われているが作業療法士はおらず、事務等の兼任職員が2名の他看護職員・外部からのボランティアによって実施されている。手工芸や絵画等、作業種目毎あるいは疾患毎にグループでの実施となっている。医師からは作業療法の専門的知識・技術の不足に対する支援および、作業療法に関する研修や資格取得の機会の確保に関する要請があった。

【考察】現況把握はまだ不十分であるが、精神保健領域でも一定の蓄積・基盤はあり、リハビリテーション・作業療法の発展のため、作業療法士養成の必要性があると思われる。

【参考文献】勝田吉彰「ミャンマー精神科医療の現状と課題」臨床精神医学, 第46巻第4号, 2017

リハビリテーション分野におけるグローバルな国際協力  
～愛知からアジアへ、そしてまた愛知へ？～

◎石本 馨<sup>1)</sup>，河野 眞<sup>2)</sup>，林 かぐみ<sup>3)</sup>，樋口 倫代<sup>1)</sup>

1)一般社団法人 Bridges in Public Health 2)国際リハビリテーション研究会 3)公益財団法人アジア保健研修所

【はじめに】

Bridges in Public Health は愛知県で地域保健分野の国際協力に寄与する人材の育成とネットワーキングを行っている。2018 年 9 月に国際リハビリテーション研究会との共催で、リハ分野の国際協力に関心のある個人・団体の交流を目的とした「国際リハフェス 2018」（以下、リハフェス）を開催した。企画および運営に当たっては保健分野の国際協力 NGO であるアジア保健研修所（愛知県：以下、AHI）の全面協力を得た。

【リハフェスの概要】

リハフェスは 3 部構成で開催された。第 1 部は作業療法士 3 名による途上国での活動紹介を中心としたシンポジウムで、リハ分野の国際協力の可能性について意見交換された。第 2 部は AHI 訪問で、1980 年に設立された経緯と、国内外での活動が紹介された。リハフェス開催時はアジア各国の保健ワーカー対象の研修期間中で、AHI には 8 か国計 12 名の研修生が滞在していた。第 3 部では AHI 研修生をリソースパーソンとして交流会が催された。2 日にわたるリハフェスの参加者は延べ 46 名で、参加者の背景は医療関係者・学生や、福祉関係者、障害当事者、留学生、研究者、会社員など多岐にわたった。

【参加者の反応とその後】

参加者の反応は概ね良好であった。リハフェスは硬軟取り混ぜたプログラムであったが、それが功を奏した印象で、各自の関心度や経験値に合わせた参加形態が取れたと思われる。参加者間の交流も見られ、互いの存在や活動を知る機会になったと話す者もいた。参加者の中には JICA や NGO のプロジェクトで AHI 研修生の母国で活動した者もあり、第 3 部の交流会では AHI 研修生の母語で会話する場面も見られた。リハフェス参加者との交流は、AHI 研修生にとっても自身の国の状況や活動を新たな視点で見直す機会となったようであった。

参加者や関係者間の交流はリハフェス終了後も続き、県内で開催される国際協力関連のイベント、勉強会、ワークショップ等の開催や相互参加が行われている。

【おわりに】

リハフェスは国際協力をキーワードに集まった者が、互いの活動を理解する機会になった。運営側としても、この分野に関心を持つ個人や団体を新たに発掘することができた。リハフェスを機に生まれた緩やかなネットワークは、今後も多様な活動に展開されるものと思われる。



## 南米パラグアイ共和国における JICA 青年海外協力隊としての活動報告

---

◎長田 真弥<sup>1)</sup>

1) 医療法人健老会姉ヶ崎ケアセンター

---

### 【はじめに】

筆者は2017年6月から2019年6月まで、独立行政法人国際協力機構（以下、JICA）の青年海外協力隊（以下、JOCV）として南米のパラグアイ共和国（以下、パラグアイ）で活動した。パラグアイは、南米の内陸に位置する国で人口は約685万人、国土面積は日本の約1.1倍の約41万km<sup>2</sup>である。配属先はアルトパラナ県ミンガグアス市役所が運営しているクリニックで、現地の人々の健康増進・医療技術職への技術指導を実施した。パラグアイの理学療法士の現状報告と今後の海外ボランティアに向けての活動紹介を目的とする。

### 【活動内容】

配属先は、2012年に市役所が貧困な患者への理学療法を提供することを目的として設立されたクリニック『APAMINGA』であり、患者の治療、同僚・学生への指導、職場環境整備を行った。また、現地の貧困な患者への訪問リハビリを実施した。患者の内訳は、骨・関節疾患が8割を占め、肥満や過労による腰痛症や肩・膝関節の関節症が大半であった。また、交通事故や転倒による骨折の患者は、受傷後または術後2～6か月後に来院していた。術後早期リハビリの効果が認知させておらず、医師からのリハビリ処方が遅くなる状況がみられた。

更に、患者カルテを作成して情報を管理し、初期評価から治療の経過などを共有した。言語の部分では同僚と協力し、身体評価の結果や治療プログラムを作成した。

### 【考察】

パラグアイの理学療法士を取り巻く環境の中で2つの課題があると感じた。一つ目は、腰痛や骨折など多くの患者がいるが理学療法を行う専門職が少ないこと。その為、肥満や関節症などの疾患に対する予防医療の啓発が必要であると感じた。JOCVが現地の患者へ伝えられる期間は一時的なものであり、現地の理学療法士やボランティアへの指導や冊子などを作成する必要がある。

二つ目は、患者カルテなどの客観的評価の定着である。パラグアイでは、養成校での治療実習や臨床実習の現場で、理学療法士の指示通りに学生が行う形式が主流である。その結果、多くの学生が患者を評価し治療するというサイクルが出来ない。更に、身体評価を客観的に残すことをせず、治療効果を医師に報告する際、客観的に示すことが困難である。

現地の理学療法士への技術支援やリハビリテーション分野の管理・運営など多くの課題がみられるが、今後は養成校など教育機関における支援も視野にいれる必要があると感じた。”

ベトナム社会主義国での活動報告と今後に期待しての活動報告

◎飯塚 和大<sup>1)</sup>

1) 元 Jica 海外協力隊

【はじめに】

現在、ベトナムには各国から多くのボランティアが集い日々ベトナムの病院・施設で活動している。演者も同様に作業療法士とし、2年間ベトナム北中部にあるタインホア中央療養リハビリテーション病院（以下：配属先）で活動を実施した。活動中、多くのボランティアとも共通した問題提起として、作業療法の認知度の低さ、作業療法士を含んだセラピストが国家資格ではない事などが挙げられた。要因として現地スタッフの知識や技術不足の人的要因と伝統医療や物理療法に頼った介入が多い環境要因が考えられた。またそれは地方に向うにつれて顕著に現れていた。そこでそれら人的要因と環境要因の解決を目的として活動を行ったのでその成果を報告する。

【目的】

作業療法に関する技術や教育の浸透していないベトナムの地方病院において、現地セラピストに作業療法に関する技術の向上や作業療法の重要性の認識向上を目的に、いかなる伝達方法や工夫が現地セラピストの質の向上をもたらすか検証する。

【対象と方法】

配属先の作業療法科には2名の同僚（以下：CP）が所属している。いずれも3ヶ月の研修を経て、現在作業療法科を設立し7年が経過している。作業療法に対して、上肢へのマッサージという概念であり日に約30名来室する脳外や整形外科の患者に対して同様の施術を行っていた。演者はまず、CPの作業療法に対する認識を知るためにCP学生時代ノートの翻訳やベトナム語での対話を図った。また、評価法など作業療法に関わる資料をベトナム語で作成、解剖学に必要な模型等も現地にある材料を用いてCPと共に作成した。他にも訓練内で使用する訓練道具の作成を行った。

【結果】

日本の作業療法を紹介し、かつCPとともに患者への作業療法の提供していった。ベトナム語を使った対話や、徐々に勉強会を取入れ、行う作業療法に変化がみられた。演者の活動期間中に現在作業療法養成中の学生の実習を受け入れた。CPが指導に当たる様子もみられた。

【考察】

CPに対し日本の作業療法の活動や実技を通じた手技の伝達することでベトナムのリハビリテーションと異なる事を実感していったと考える。またそれは、日本の作業療法の押しつけではなく治療や考え方の選択肢の一つとして伝わるように意識して伝達したため現地スタッフの受け入れはスムーズであったと考えられる。

文化的背景を考慮したリハビリテーションの提供：ドイツ平和村の事例から

◎勝田 茜<sup>1)</sup>，山口 佳小里<sup>2)</sup>

1) 姫路獨協大学医療保健学部 2) 国際医療福祉大学成田保健医療学部

【背景】

国際協力の活動の場や形態は多彩であるが、どの活動においても現地に適応した技術を提供することが求められる。グローバル化が進む中、日本国内においても、外国人にリハビリテーション（以下、リハビリ）を提供する機会は増加することが予測される。場所によらず、対象者とセラピストの母国が異なる場合、対象者の文化的背景を考慮し、母国での生活に合わせたリハビリを提供することが肝要である。しかし、これに関する知見は十分に集積されていない。ドイツ国際平和村（以下、平和村）は中央アジア諸国をはじめ発展途上国の子どもを対象に医療支援を行っている人道援助団体である。平和村における、文化的背景を考慮したリハビリ実践について報告する。

【方法と結果】

2 症例を事例毎に紹介する。

< 症例① >

アフガニスタンの女子：学齢期。母国で地雷により下肢を損傷。渡独時、下肢切断、関節拘縮、骨髄炎を有する状況であった。車いすを使用し、身の回りのことは自立していた。渡独後、治療を経て右下肢に義足を作成した。母国では床上生活であることを配慮し、トイレ等の家屋環境を聴取しながら、立ち上がり動作等に重点を置いて訓練を行った。床へ坐る動作および立ち上がる動作を繰り返して練習したことで、母国の生活スタイルにおける就寝や食事などの日常生活動作に対する能力を獲得した。

< 症例② >

アンゴラの男子：10 代前半。母国にて骨折し、骨髄炎となった。渡独後は病院に入院し右下肢の大腿切断を行った。切断後は、右下肢に義足を作成し歩行訓練、日常生活動作訓練を行った。その頃のリハビリに対し膝折れ等の不安により、荷重訓練を積極的に取り組めない様子が見られた。そこで、母国でよく行っていたリング採りを実施した。母国での馴染みの活動を取り入れたことで、リハビリを楽しみながら行うことが可能になり、荷重する事への不安も軽減した。義足装着した際には、他の子どもたちと同様のことが行える状況であった。

【考察】

平和村でリハビリを行う際に、「子どもたちは帰国する」ということを常に意識し、ドイツでの生活を評価するのではなく、母国での生活を評価しリハビリの実施するよう心掛けた。母国での生活の評価を試みるうえで、子どもとのコミュニケーションだけでなく、家族の話を聞くことで、子どもの生活環境や家屋の状況、キーパソン、子どもの役割などを知ることができた。

日本におけるタイ研究の動向  
～2000 年度から 2019 年度科研費採択課題の分析より～

---

◎山口佳小里<sup>1)</sup>

1) 国際医療福祉大学成田保健医療学部

---

【はじめに】

これまで日本の学術領域で様々な国に関する研究がなされてきた。しかし 1 つの国に関する領域横断的な研究動向については、明らかにされていない。

【目的】

本研究では、日本におけるタイ研究の動向を明らかにする。また、国際リハビリテーション領域の研究が、タイ研究の中でどのような位置づけにあるか明らかにする。

【方法】

2000 年度から 2019 年度までの 20 年間に、科学研究費助成事業（科研費）に採択された研究課題のうち、課題名に「タイ」を含むものを検索した。該当した演題を、学術的な区分で分類し、さらに国際リハビリテーション学関連領域として、保健・医療・福祉に関連するものを選定し、年度の経過に伴う課題数の推移を整理した。

【結果】

該当する研究課題は 20 年間で合計 415 課題であった。そのうち、筆頭研究者が外国人（おそらくタイ人）であるものは、14 課題であった。学術的な区分は多岐にわたった。その中で、20 年間の合計課題数が多く、継続して取り組みがあったのは、地域、文化人類学および民俗学、教育学、経済・経営学、社会学、衛生学及び公衆衛生学、政治学、人文地理学であった。宗教学と看護学（高齢者関連）の研究が増加傾向であり、農業関連は減少傾向、財政金融学関連は 2000～2004 年の期間においてのみ取り組まれていた。保健・医療・福祉に関する研究課題は合計 44 課題で、対象期間の後半において前半の約 3 倍の課題数であった。保健・医療・福祉に該当する研究課題をクラスター分析したところ、地域保健、HIV/AIDS、介護、医療福祉システム、疾病予防、感染症等が項目として挙げられた。

【考察】

該当する 415 課題のうち、課題数が多く継続的に取り組まれていた学術領域は、タイの特徴や社会的課題を反映していると考えられる。例えば金融・財政関連の研究課題については、1997 年のアジア通貨危機を、看護学領域の高齢者関連の研究の増加は、近年のタイの高齢化を反映していると考えられる。保健・医療・福祉分野に関して、対象期間の全研究課題に占める割合は 1 割程度と、日本のタイ研究の主流ではないと言えるが、この限られた領域においても、全学術領域と同様に、扱われている課題はタイの特徴や社会的情勢を反映していると考えられた。

国際的なリハビリテーション支援に関する研究動向  
～2009 年度から 2018 年度までの日本理学療法学術大会の演題分析より～

◎高橋 恵里<sup>1)</sup>, 大室 和也<sup>2)</sup>

1) 東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科 2) NPO 法人 AAR Ja pan [難民を助ける会]

【はじめに】

我が国の理学療法士による国際的なリハビリテーション支援の領域において、これまでになされてきた研究や実践報告について、俯瞰的に整理・分析した報告は見当たらない。先行研究や実践報告を分析することで本領域の研究における現状を把握することができ、今後の課題について知ることができると考えた。

【目的】

本研究では、日本理学療法学術大会で発表された演題の内容を分析することで、理学療法士による国際的なリハビリテーション支援の領域における現状を把握することを目的とした。

【方法】

2009 年から 2018 年まで 10 年間の日本理学療法学術集会の演題のうち、キーワードに「国際」を含むもの、ならびにそのタイトルから国際的なリハビリテーション支援に関わる内容であることが明らかな演題を検索した。該当した演題を、種別、テーマ、研究手法、領域等の項目で分類した。

【結果】

22 演題が条件に合致した。種別は、研究報告 8 演題 (36.4%)、実践報告 14 演題 (63.6%) であった。テーマは、教育・研修 7 演題 (31.8%)、地域 7 演題 (31.8%)、医療 6 演題 (27.3%)、管理 2 演題 (9.1%) であった。研究報告について、全てが調査研究であった。研究報告の分析手法は、量的分析 3 演題、質的分析 2 演題、量的および質的を混合した分析 3 演題であった。質的に分析を行った研究について、分析方法が不明確なものが多かった。

【考察】

研究報告、実践報告共に演題数が限られていた。全体について、教育・研修をテーマにしたものが全体の 31.8%と多く、我が国のリハビリテーション支援の役割として教育が求められている可能性が考えられる。また、よくデザインされた研究報告または介入研究が見当たらず、今後はエビデンスを確立するために大規模調査および介入研究の実施が必要であると考ええる。

「介護分野における外国人人材を対象とした専門日本語教育」

・ 演者

- ： 野村 愛 （首都大学東京）
- ： 奥村 匡子（首都大学東京）
- ： 石井 清志（国際医療福祉大学成田保健医療学部）

・ 座長

- ： 河野 眞 （国際医療福祉大学成田保健医療学部）

EPA（Economic Partnership Agreement/経済連携協定）による介護福祉士の受け入れは 2008 年に開始された。開始時はインドネシアからのみの受入れであったが、2009 年にフィリピン、2014 年にベトナムからの受入がはじまり、現在は 3 カ国から毎年多くの介護福祉士候補者が来日しており、今後も増加することが見込まれる。EPA で来日した介護福祉士候補者は国内の介護・福祉施設で実務経験を積みながら国家試験の合格を目指すこととなる。

2019 年 4 月からはじまった「特定技能制度」では、介護分野において特定技能 1 号の受け入れが開始された。現在、国内およびフィリピン、インドネシア、モンゴル、ネパール、カンボジアの各国で日本語による「介護技能評価試験」「介護日本語評価試験」が実施されており、それらの試験に合格した人材が来日し、介護施設等で就労する事となる。

＜特定技能 1 号の受け入れが可能となっている 14 分野＞

- |          |           |        |          |              |     |     |
|----------|-----------|--------|----------|--------------|-----|-----|
| ①介護      | ②ビルクリーニング | ③素形材産業 | ④産業機械製造業 | ⑤電気・電子情報関連産業 |     |     |
| ⑥建設      | ⑦造船・舶用工業  | ⑧自動車整備 | ⑨航空      | ⑩宿泊          | ⑪農業 | ⑫漁業 |
| ⑬飲食料品製造業 | ⑭外食業      |        |          |              |     |     |

このように、介護分野では EAP と特定技能による外国人人材の就労が見込まれるが、日本での生活、施設での就労、国家試験など様々な場面で日本語能力が必要となることは言うまでもない。さらに、介護分野においては、日常生活で使用する一般日本語のみならず、介護の現場で使用する専門的な日本語も必要となる。

今回のセッションでは、外国人介護福祉士候補者への専門日本語教育の経験を有する日本語教師、作業療法士を演者にむかえ、今後の専門日本語教育について検討する。

「国際リハビリテーションにおける障害当事者とリハ専門職の協働の可能性」

---

・ 演者

- ： 石本 馨 （Bridges in Public Health ）
- ： 林 早苗 （笹川平和財団 アジア事業グループ）
- ： 石田 由香里 （JICA 北海道）

・ 座長

- ： 笹田三郎（アプカス）
  - ： 大室和也（難民を助ける会 [AAR Japan]）
- 

「当事者性」あるいは「当事者の視点」が十分にプログラムに反映されていることは、国際協力や地域開発の分野においては不可欠な条件となっている。反対に、その視点がプログラムから欠如した時、地域の文脈に沿わないプログラムになったり、プログラムを本当に必要としている人に届かないということになったりする。

障害分野の開発プログラムにおいては、障害のある人がそのプログラムの当事者となる。ただ、リハビリテーションシステムの確立、障害者の生計向上、またインクルーシブ教育の推進といったプログラムでは、「障害のある」ということだけではなく、高齢者から子どもまで幅広く年代も意識する必要があり、さらに機能障害の種別を考慮する必要もあるだろう。「障害当事者」として一括りにしてよいのだろうか、という疑問が残る。

今回は、シンポジストの皆様から、国際リハビリテーション活動を展開する際、リハビリテーションスタッフと障害当事者がどのように連携し協働してきたかについて報告して頂く。障害の当事者性をどのようにプログラムに活かしてきたか、それによって地域の受益者にどのような影響があったか、一方で課題や困難なことについても話題にする予定である。その報告を通じて、リハビリテーションスタッフと障害当事者の立ち位置や有り様の輪郭が形作られてことを期待している。

---

## 学術大会概要

---

大会名： 国際リハビリテーション研究会 第3回学術大会

テーマ： 世界の多様性に貢献するリハビリテーション

大会長： 河野 眞

国際医療福祉大学 成田保健医療学部 作業療法学科 教授

会 期： 2019 年 11 月 9 日（土） 10 時～17 時

会 場： 聖心女子大学 4 号館聖心グローバルプラザ

---

## 学術大会学会運営組織

---

実行委員： 石井 清志 国際医療福祉大学 成田保健医療学部

大室 和也 AAR Japan[難民を助ける会]

勝田 茜 姫路獨協大学 医療保健学部

高橋 恵里 東北福祉大学 健康科学部

山口 佳小里 国際医療福祉大学 成田保健医療学部

(敬称略)

---

国際リハビリテーション学 第2巻1号

発行者：国際リハビリテーション研究会

所在地：〒286-8686 千葉県成田市公津の杜 4-3

国際医療福祉大学 成田保健医療学部 作業療法学科

TEL:0476-20-7725 FAX:0476-20-7702

---